

地獄の一季節 註解(二)

小 田 良 弼

Si j'avais des antécédents à un point quelconque de l'histoire de France !

Mais non, rien.

フランスの歴史を調べてみて、何処かにこの俺の身元が見つかったらば。

いや、いや、そんなものはない。

この antécédents は Mauvais Sang, P. 13 の

J'ai de mes ancêtres gaulois l'oeil bleu blanc,.....

とある。この ancêtres gaulois に、また同 p. 18 に

Me voici sur la plage armoricaine.....comme faisaient ces chers ancêtres autour des feux.

とある。この ancêtres autour des feux に対応する。もちろん、ここはさうはつきりと限定する必要もないかもしれないが、少くともランボオ的世界の一面が、これら ancêtres に具現されてゐるものと考へてゐる。かく自己の世界の具現者としての antécédents をフランスの歴史の中

に探ってみようとするのであるが、このフランスは、「東洋の終焉この方始」た西洋」(L'Impossible) の一つとしてのフランスであり、キリスト教の国フランスであり、知性文化の国としてのフランスであり、政治的闘争、革命暴動の国フランスであり、結局 *narais occidentaux* としてのフランスである。

したがってランボオのすむ世界ではなく、自己の antécédents を見出せないわけである。かくて *mais non, rien* といふわけである。

Il m'est bien évident que j'ai toujours été race inférieure.

Je ne puis comprendre la révolte. Ma race ne se souleva jamais que pour piller : tels les loups à la bête qu'ils n'ont pas tuée.

俺はいつも劣等人種であったことは解り切つてゐる。俺は叛逆といふものが理解できない。俺の人種は掠奪の時でなければ、決して立ち上らなかつたのだ。狼が殺し切らなかつた獣物に跳りかかるやうなものだ。「死肉を漁る狼の様に。」

Il n'est bien évident que j'ai toujours été race inférieure :—
Mauvais Sang, p. 16 じ

La race inférieure a tout couvert—le peuple, comme on dit, la
raison ; la nation et la science.

劣等人種がすべてを覆った——民衆をも、また同じく理性をも。
国家をも、また科学をも。

とあり、同 p. 18 じ

J'attends Dieu avec gourmandise. Je suis de race inférieure de
toute éternité.

俺は貧欲にがつがつと『神』を待ってゐる。俺は永久無限の劣等
人種だ。

と書いてゐる。この様に race inférieure は、世俗とこの peuple 即ち
nation を、raison 即ち science を否定した彼方の世界にあるもの、言葉
を換へていへば一切の二元対立の相対的世界の否定の彼方にあるもので
あり、したがって当然 inférieure といふ様に、日常実利的生活からの類
落の一面をもつものである。

しかもランボオ的世界が真に展開せられるためには、この二元対立の
相対的世界の否定を媒介とせねばならない。その限りにおいてこの race
inférieure はランボオ的世界展開のための必須の段階であるともい
う。しかし上掲 p. 18 の節いふ様に、race inférieure においては、ま
だ『神』を「がつがつとして待」ってゐるのであり、「ひきつひき」

Je reviendrai, avec des membres de fer, la peau sombre, l'oeil
furieux : sur mon masque, on me jugera d'une race forte. J'aurai

de l'or : je serai oisif et brutal. Les femmes soignent ces féroces
infirmes retour des pays chauds. Je serai mêlé aux affaires politi-
ques. Sauvé.

俺は、鋼鉄の四肢と浅黒い肌と、兇暴な眼とをもつて還つて来る
だらう。人々は俺の面貌を眺めて強烈な人種の生れと考へるだら
う。黄金を俺は貯めよう、「俺は財宝を獲るだらう、」何も為ない、しか
も獣物のやうな「無為な、フリユタアルな」男にならう。女達は熱帯
の国々から帰還するこれらの兇暴な廢人共を看護するのだ。俺は政
治の渦中に捲き込まれるだらう。救はれるのだ。

といひ、その徹底還相行を語らざる得ず、しかもこれがいまだ、思想的
予見に止り、race inférieure の域に止るかぎりは、

Maintenant je suis maudit, j'ai horreur de la patrie. Le meil-
leur, c'est un sommeil bien ivre, sur la grève.

差当つては呪はれの身だ、俺は祖国を怖れてゐる。砂浜にごろり
と臥して眠りこけるのが何よりだ。

と書いてゐる様に、海辺の酣眠を求めざるを得ず、そこには真実にはま
だ神が現成しないのである。p. 18 じランボオの使つてゐる言葉をその
まま借りるならば、le sang païen が即ち l'Esprit であり、l'Esprit が即
ち le sang païen であるときに、即ち往相即還相としての徹底還相行にお
いてのみ、真実に Dieu が現成するのである。しかしまたかかる徹底還
相行も race inférieure を媒介としてのみ可能なのである。かくてこの
race inférieure はランボオ的世界の往相面を語るものと見てよいであら
う。

今、本節において、かかる意味での *race inférieure* として、自己をフランスの歴史の中に位置付けてあるわけである。

Mauvais Sang, p. 13 に出づきた

La cervelle étroite, et la maladresse dans la lutte

とか、

Les écorcheurs de bêtes, les brûleurs d'herbes les plus ineptes de leur temps.

だとか、あるいは同 p. 18 のブルモルの海岸における

L'air marin brûlera mes pounons; les climats perdus me tannent. Nager, broyer l'herbe, chasser, fumer surtout; boire des liqueurs fortes comme du métal bouillant,.....

だとかはその具体的な姿の一面を語つてゐるものとよくよく。

かく、フランスの歴史の中には、どこを探してみても、自己の *antécédents* を見出すことができず、明かに俺はかかるフランスの歴史の各定の彼方にある *race inférieure* だ、と云ふことを言つてゐるのである。

Je ne puis comprendre la révolte: —

この言葉は前節 p. 14 における *déclaration des Droits de l'Homme* をうけてゐる言葉であり、これにひびく *Ma race ne se souleva jamais que pour piller*:.....なる言葉との連関において解釈されねばならない。

「人間諸権利の宣言」を標語として闘つた政治闘争、革命暴動が念頭にあつたのであらう。上記の様な意味における *race inférieure* としてのランボオには、かかる革命暴動は理解することはできない。かかる政治闘争の世界を否定した彼方の世界にある *race inférieure* であるから。

それはあたかも「死肉を漁る狼」、即ち自分自らが殺したのではない獣を食ふ狼にほかならない。Bateau ivre になつて

Dans les clapotements furieux des marées,

Moi, l'autre hiver, plus sourd que les cervaux d'enfants,

Je cours! Et les Péninsules démarées

N'ont pas subi tohu-bohu plus triomphants.

潮騒の唼り狂へる高鳴りの真中を、曩の

冬なりき、幼き児らの脳髓より、なほ耳鈍く、

馳駈したり。纜解かれし半島も、これに勝りて

誇らしき大混乱に陥りしためし無かりき。

と云つてゐる。(なほランボオ全集《人文書院》には *clapotements furieux des marées* には「革命の世界」と、l'autre hiver には「一八七一年二月か」と脚註が附せられてゐる。)

Ma race ne se souleva jamais que pour piller: tels les loups,

à la bête qu'ils n'ont pas tuée: —

ma race はもちろん *race inférieure*、ランボオ的世界の往相的一面を示す *race inférieure* は、日常実利的世界からは頹落した無能無用の間である。そこには功利的実利のはからひは一切なく、したがって他を殺して食はうとする所はない。食ふにしても死肉を漁る狼の如くである。さういふ場合にしか立ち上がらないのである。無求、無一物を行ずるわけである (Cf. Fêtes de la Faim)。かかる世界を媒介としてのみ、神がひらかれ、軽やかな自然法爾の世界もひらけてくるのである。そこには *la révolte* の片影すらない。こゝで “Le loup criait sous les

feuilles”を「用ひつゝなかつた」。

Le loup criait sous les feuilles
En crachant les belles plumes

De son repas de volailles :

Comme lui je me consume.

Les salades, les fruits

N'attendent que la cueillette ;

Mais l'araignée de la haie

Ne mange que des violettes.

.....

食事にとつた飼鳥の

きれいな羽を吐き出して、

樹蔭で鳴いた狼の

真似して俺も寝れよう。

野菜のサラダや果物の

もがれる許りでゐるものを、

垣根の蜘蛛めの食ふものは

ただ、紫の葶草。

.....

Je me rappelle l'histoire de la France fille aînée de l'Eglise.

J'aurais fait, manant, le voyage de terre sainte ; j'ai dans

la tête des routes dans les plaines souabes, des vues de Byzance, des remparts de Solyme ; le culte de Marie, l'attrandrissement sur le crucifié s'éveillent en moi parmi mille fêtes profanes. — Je suis assis, lépreux, sur les pots cassés et les orties, au pied d'un mur rongé par le soleil. — Plus tard, reître, j'aurais bivouqué sous les nuits d'Allemagne.

Ah ! encore : je danse le sabbat dans une rouge clairière avec des vieilles et des enfants.

俺は『教会』の長女たるフランスの歴史を想ひ起す。俺は、賤民なりに聖地の旅をしたのかも知れない、俺の頭の中には、シネワール本の野を横切る諸街道、コンスタンチノオプルの四方の眺め、ジェルサレムの城壁もある。聖母礼拝と救世主への感激とは、百千の俗世間の神仙境のさなかに於いて、この身に目覚める。——太陽に蝕まれた壁の下で、破れた壺やいらくさの上に、俺は癩を病み坐つてゐる。——それから後に中世紀の騎兵となつて、ドイツの夜々を、野営に明かしたかも知れない。

ああ、まだある。俺は老婆や子供と手をつないで、赤く染つた森の空地に、魔法師の夜宴を踊つてゐる。

Je me rappelle l'histoire de la France fille aînée de l'Eglise : —

こゝで、さきに mais non, rien として否定したフランス、教会の長女としてのフランスの歴史を想起しようとしてゐる（キリスト教ももちろんランボオに對しては否定されてゐる）。本節の冒頭において mais non, rien といつて否定したフランスの歴史を、こゝでまた想起しようといふこと

は、かかるフランスの中に、仮に、*race inférieure* である自己を思い
みれば、それは *manant* として、かくかくでもあったらうかといふ様な
意図の下になされてゐるのであらう。またそこに母親から受けた宗教教
育、それに対するランボオの対し方の想出があるのもあらうか。聖地
の旅をし、シェワールベンの野を横切る諸街道や、コンスタンチノオプ
ルの四方の眺めやイエルサレムの館が頭の中にあり、聖母礼拝と救世主へ
の感激もめざめながら、一方破れた壺、いらくちの上に坐った *lépreux*
であり、野営する *reître* ともあった、そして遂には *sabbat* の踊りを踊
る *manant* ともあったのだ、といふことはこのフランスの中であつて、
ランボオが歩んできた道とその姿を示すものでもあつたのであらう。

J'aurai fait, manant, le voyage de terre sainte: —

manant に対してランボオはいつも好意的な愛情をよせてゐることは
記憶しておいてよいことであらう (Cf. *Forgeron; Délires II; etc.*)。それ
は根源的な人間の姿、自然法爾の世界があらあらに露呈されてゐる人間
として、好意的な愛情をよせてゐるのである。

したがって、ここに自己を *manant* としてフランスの中に位置づけよ
うとしてゐることは、やはり一種の *race inférieure* として、フランス
の歴史の中にそぐはぬものとして、いや、フランスの歴史の否定の彼方
の世界にあるものとして、したがって一般社会とはそばそばの、しかし
一步真実なる世界にふみだした愛すべき人間としてのニュアンスをこめ
てゐるものと考へられる。

「聖地の旅をしたのかも知れない」とは、フランスの中にあつては、
manant であるこの俺も、聖地の旅もやったことであらうといふ様なニ

ュアンスがこめられてをり、ここに少年時、母親から受けた宗教教育の
回想が働いてゐることと思はれる。

以下五行にわたつて述べてゐるシェワールベン、コンスタンチノオプ
ル、イエルサム、マリヤ、救世主に関することは、ランボオが耳にし、
目にふれたキリスト教関係のものであらう。挿絵や絵紙の如きものか
ら来てゐるものもあつたのだらう。Délires II, p. 51 へ

*J'aimais les peintures idiotes, dessus de portes, décors, toiles
de salimbanges, enseignes, enluminures populaires; la littérature
démodée, latin d'église, livres érotiques sans orthographe, roman
de nos aïeules; contes de fées, petits livres de l'enfance, opéras
vieux, refrains naïfs, rythmes naïfs.*

俺は白痴のやうな絵を愛してゐた、欄間の飾、舞台の背景、辻芸
人の辻びら、看板、絵草紙を。又時代遅れの文学を俺は愛した。教
会のラテン語を、誤字だらけの好色本を、俺達祖先の物語を、妖精
の作嘔を、少年時代の豆本を、古めかしいオペラを、愚にもつかな
い豊句トクゴや、他愛ないリズムを愛した。

といつてゐる、この中で、欄間の絵だとか絵草紙だとか、教会のラテン
語だとか、俺達祖先の物語だとか、妖精の作嘔だとか、少年時代の豆本
だとかは、あるいはここに語られてゐる事柄と連関をもつてゐる様にも
思はれるのである。

*Je suis assis, lépreux, sur les pots cassés et les orties, au pied
d'un mur rongé par le soleil: —*

こゝへは *lépreux* として風雨にさらされた壁の下、壊れた壺、いら

くさの上に坐つてゐる。直接には聖地の旅との連関において出てきた言葉ではあらうけれども、上記の聖地、マリア、救世主に対して、*manant* としての一つの姿がここにおし出されてゐるのである。

教会の長女としてのフランスの歴史の中に自己を位置づけて、かかる *lépreux* でもあつたらうといふことは、そこにキリスト教との背離を語つてゐるとともに、*manant* として自然法爾の、あるいはそれに近い人間として自己をおし出してゐるのであらう。俺はやはり、フランスの中であつて、フランスの生活からは類落した *race inférieure* としてかかる *lépreux* でもあつたらうといふのである。

Plus tard, reître, j'aurais bivouqué sous les nuits d'Allemagne : — reître は中世紀、フランスで使つたドイツ騎兵であるが、これは粗野な人間共とされた連中である。やはり *manant*, *race inférieure* の一つとしてあげてゐるのである。

Ah ! encore : je danse le sabbat dans une rouge clairière, avec des vieilles et des enfans : —

sabbat といふのは魔法使ひの夜の集ひであり、その大騒ぎは鶏鳴に至ると伝へられてゐる。ここは前の *reître* からの聯想で「Walpurgis の夜」が念頭にあつたのかも知れない。「Walpurgis の夜」はやはり *sabbat* の集ひであり、ドイツの物語によると、五月一日の夜、山の上で悪魔が春の回つてきたことをたたへる集ひであるといふ。

この悪魔、魔法使ひの踊りを踊るといふことは、*Mauvais Sang*, p. 7 に、

O sorcières, ô misère, ô haine, c'est à vous que mon trésor a

été confié !

とあつた様に、この世を変へる (*Changer la vie*)、財宝が託せられるべき、踊りを踊るといふことである。即ち世俗としての現世否定の踊り、そこに真にランボオ的世界が展開せられるための踊りを踊ることを意味するのである。

即ち上来、教会の長女としてのフランスの歴史の中に *manant* としての自己をおいてみて、かくもあつたらうかと思ひ、あるいはキリスト教内の人間として、あるいは *lépreux* として、あるいは野營する *reître* として思ひ浮べてみるが、やはりここでも、またしても、自分は、上記の意味での *sabbat* の踊りを踊ることだらうとの意である。

rouge clairière とは何を意味するのか。*clairière* は恐らくは山上の *sabbat* の集ひに連関して出てきた語であらうと思はれる。したがつてここでは *rouge* が問題になる。赤は普通ランボオにおいては否定行の「けしき」、動的な「けしき」、熱情的なものの象徴に多く使はれてゐる。

Cf. Qu'est-ce pour nous, mon coeur ?

Qu'est-ce pour nous, mon coeur, que les nappes de sang

Et de braise, et mille meurtres, et les longs cris

De rage, sanglots de tout enfer renversant

Tout ordre ; et l'Aquilon encor sur les débris ;

俺の心よ、血と燠の、真赤な水脈と大虐殺、

長く尾を曳く憤怒の叫喚、秩序は一切くつがへす

地獄の底のすすりなき、それが一体何だつて？

廢墟の上には今日もなほ北風さむく吹くばかり。

Cf. Voyelles.

A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu : voyelles,

.....

L, pourpres, sang craché, rire des lèvres belles

Dans la colère ou les ivresses pénitentes ;

A は黒、E 白、I 赤、U 緑、O は藍色、母音よ、

.....

I、真紅、吐かれし血、悔悛の陶酔か

はた 憤怒の中の 美しき唇の哄笑。

かくて rouge clairière には山上における「この世を交へる」、即ち世俗としての現世否定のはげしい sabbat の踊りが暗示せられてゐる。

avec des vieilles et des enfans といふのは、老人と子供はいはば自然的に、世俗としての現世の埒外にあるものとして引き出されてゐるわけである。現世の醜惡汚濁から脱した、またその汚れをいまだ知らぬものとしていふのである。ランボオは自己の世界の具体的に露呈せられるものとして動物や蠻地や賤民などをあげてゐるが、なほそのほかに老人と子供もとりあげてゐる。

Cf. Bateau ivre, 24^e

Si je désire une eau d'Europe, c'est la fraîche

Noire et froide où vers le crépuscule embaumé

Un enfant accroupi plein de tristesse, lâche

Un bateau frêle comme un papillon de mai.

若しわれにして欧羅巴の、今なほ、水を望むとせば、

地獄の一季節 註解

そは、冷かなる^{ヒヤ} 黝^{クロ}き^{コモリ} 隠^{カクレ}沼、風薫る夕暮^{トキ}どきに、
悲^{アハレ}しみの溢^トるる童子 蹲^{カマシ}踞りて、五月の蝶を
さながらの木葉の小舟を放ちやる 森の水沼^{ノミヅ}

Cf. Matinée d'ivresse.

Cela commença sous les rires des enfans, cela finira par eux.

これは子供達の笑ひて始まったが、又、彼等の笑ひて終るだらう。

その他、Les Effarés 等参照、また、

Cf. Phrases.

Qu'il n'y ait ici-bas qu'un vieillard seul, calme et beau, entouré
d'un 《luxu inoui》, — et je suis à vos genoux.

『前代未聞の栄耀榮華』に取り巻かれて、静かな美しい老翁だけが、たった一人、この下界に棲んでゐてくれたら。——私は貴方の膝下にひれ伏します。

即ち俺が rouge clairière において踊る、世俗としての現世否定の sabbat の踊りはかかる老人、子使らと共にである。

Je ne me souviens pas plus loin que cette terre-ci et le
christianisme. Je n'en finirais pas de me revoir dans ce
passé. Mais toujours seul ; sans famille ; meme, quelle
langue parlais-je ? Je ne me vois jamais dans les conseils
du Christ ; ni dans les conseils des Seigneurs, — représent-
ants du Christ.

この下界と基督教、それより前は俺には覚えがない。この過去の裡に、自分自身を見直してゐたら限りがあるまい。だがいつも俺は

一人であった。家族もなかった、俺の喋ってゐた言葉さへ、一たい何処の言葉であつたか。基督の教のなかにも、基督の代行者たる——御領主がたの教のなかにも、この俺は断じて見つからない。

Je ne me souviens pas plus loin que cette terre-ci et le christianisme. Je n'en ferais pas de me revoir dans ce passé. Mais toujours seul ; sans famille : —

このフランスおよびクリスマニズム以前には覚えはなく、このフランスおよびクリスマニズムの過去の歴史の中に自己の世界をさがしてみても、このおぼろげなものはなく。

ランボオは *Mauvais Sang*, p. 23 へ

Prêtres, professeurs, maîtres, vous vous trompez en me livrant à la justice. Je n'ai jamais été de ce peuple-ci ; je n'ai jamais été chrétien ; je suis de la race qui chantait dans le supplice ; je ne comprends pas les lois ; je n'ai pas le sens moral, je suis une brute : vous vous trompez.....

司祭や教授や先生方、俺を裁判所の手に渡したといふのが君達の誤りだ。俺はもともと、ここに居るこの民族に属してゐたことがない。基督教徒だった事は一度もない。刑罰を受けながら歌を歌つてゐた人種だ。法律などは解りはしない。道徳的意識も持つてゐない。俺は一個の禽獣なのだ。君達は思違ひをしてゐるのだ.....

といつてゐる、かかる世界にすんでゐた人間なのである。ランボオは *anti-religion* ではないが、*anti-christianisme* であつたのである。それはキリスト教が結局彼には彼岸の世界のものとして抽象的観念的に

見えたからである。

Cf. *Les premières Communions.*

Christ, ô Christ, éternel voleur des énergies.

キリストよ.....おぼろげなキリスト、人間精力の永遠の盗人よ、

Cf. *L'Homme juste.*

Socrates et Jésus, saints et justes, dégoût !

ソクラテスにイエス様、聖者に正義派、汚らはしや！

Cf. *L'Impossible.*

Monsieur Prudhomme est né avec le Christ.

俗物紳士プリュドム君は基督と一緒に生れなすつた。

所詮は自己の世界がこれとは全くの別世界 *l'autre monde* へあることを示はつてゐる。

Cf. *Vies*, II.

Je suis un inventeur bien autrement méritant que tous ceux qui m'ont précédé ; un musicien même, qui ai trouvé quelque chose comme la clef de l'amour.

俺はすべての先人達に比べては、全く違った貢献をした一発明者だ。恋愛〔愛〕の鍵とてもいふやうな或るものを発見した音楽家だと言つてもいい。

全く、ランボオは *luxe inouï* (Phrases) あるいは *futur luxe* (Vagabonds) といつてゐる様に、その他随所にいろいろな言葉で表現してゐる様に、フランスの歴史、ギリシヤ(初期を別として) 以来の伝統を背負つた西洋の歴史からは絶した、全く一つの別世界をみた真の詩人であつたといへ

よう。その意味で Voyant たらんとしたのである。そこに兇暴な哲学 philosophie féroce (Démostrate) があつたのであり、一切合切の絶望的なはげしい否定行があつたのである。そこにはまた、atroce solitude (Les Soeurs de Charité) を感じたのである。所詮は l'autre monde であり、そこに孤独を感じることは当然のことであつたといふよう。かくて Mais toujours seul ; sans famille といふわけである。

Cf. Mauvais Sang, p. 23.

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes n'étaient interdites.

Pas même un compagnon.

だが、酒宴も女等との交友も、俺には禁じられてゐた。一人の仲間をへなかつた。

Cf. Adieu, p. 85.

Mais pas une main amie ! et où puiser le secours ?

だが、友の手などあらう筈はない、救ひを何処に求めよう。

そして言葉のつながりとしては、この sans famille は p. 14 における Pas une famille d'Europe que je ne connaisse の famille がひびいてきてゐる。

même, quelle langue parlais-je ? : —

フランスの歴史の中にも自己の世界を見出すことができず、クリスチアニズムの中にも自己の世界を見出すことができず、全く別の世界にすみ、キリスト教の神ならぬ神の世界に住んだランボオにとっては、しかもその世界をフランス語を以て語らうとするからには、あまつさへランボオの世界が思慮分別、したがって言語自体を超えた世界であるからに

は、かくいふのも当然のことといふよう。ランボオにとっては自己の語るフランス語は異教徒の言葉であり、しかも神託であつたのである。

Cf. Mauvais Sang, p. 17.

C'est très certain, c'est oracle, ce que je dis. Je comprends, et ne sachant m'expliquer sans paroles patiennes, je voudrais me taire.

俺の言葉は神託だ、それは極めて確実だ。俺には解つてゐる、ただ解らせようにも異教徒の言葉しか知らないのだから、俺は黙つてゐたいのだ。

Cf. Délites I, p. 44.

Parfois il parle, en une façon de patois attendri, de la mort

時々あはれは、やさし味の籠つた田舎言葉で、……死の事や……話をします。

Cf. O saison, ô châteaux.

Que comprendre à ma parole ?

Il fait qu'elle fuit et vole !

私が何を言つてゐるのかつて、言葉などはふつ飛んじまへた！

Je ne me vois jamais dans les conseils du Christ ; ni dans les conseils des Seigneurs, — représentants du Christ : —

前記 anti-christianisme の条参照。「人文」第四号拙稿「酪酊船私解」参照。

前記の様にランボオは anti-christianisme であつたけれども、けつ

して反宗教的であつたのではない。詳細は別稿にゆづらざるを得ないけれども、ランボオは絶対否定即絶対肯定的に、この此岸の世界の一時一事に、前後際断的に（非連続的）、絶対、神の現成を行じようとしたのである。对象的に神を把えようとしたのではなく、一切の実体化対象化を許さず、悪徳を背負つた日常の茶飯事の中に絶対、神の現成を行じようとしたのである。且つ自己の救ひのみならず、他者の救済を考へてをり、そこに神の愛を説いてゐるのである。

もちろん、その救済、愛、聖の諸概念はキリスト教のそれらと必ずしも合致しないであらう。しかし依然としてランボオの世界が一種の宗教的世界であつたことは否めないと思ふ。その意味においてランボオはやはり一人の典型的な宗教詩人であつたと言つてよからうと思ふのである。

Qu'étais-je au siècle dernier : je ne me retrouve qu'aujourd'hui. Plus de vagabonds, plus de guerres vagues. La race inférieure a tout couvert — le peuple, comme on dit, la raison; la nation et la science.

前世紀には俺は何だつたか、今在る俺が見えるだけだ。最早放浪もなく、漠然とした戦争もない。「放浪もするまい、漠然たる戦も要るまい。」劣等人種がすべてを覆つた、——民衆をも「と」また同じく、理性をも。国家をも、「と」また科学をも。

Qu'étais-je au siècle dernier : je ne me retrouve qu'aujourd'hui. Plus de vagabonds, plus de guerres vagues : —

ここも前と同様に、フランスの中にも、クリスチャニズムの中に

も自己を見出すことができず、自己が全く別個の世界にあって孤立してゐることをいつてゐるのである。

Cf. Démocratie.

La crevaision pour le monde qui va. C'est la vraie marche. En avant, Route !

歩み行くこの世とは決裂だ。これこそ真の發展だ。前進せよ、出發だ。

vagabonds については *L'Impossible*, p. 69 ㄱ

Mais n'y a-t-il pas un supplice réel en ce que, depuis cette déclaration de la science, le christianisme, l'homme se joue, se prouve les évidences, se gonfle du plaisir de répéter ces preuves, et ne vit que comme cela ! Torture subtile, niaise ; source de mes divagations spirituelles. La nature pourrait s'ennuyer, peut-être ! Monsieur Prudhomme est né avec le Christ.

しかしながら、あの科学の宣言以来、基督教が、人間が、巫山戯ちらしてわかりきつた事を自ら証明し、それらの証明をくり返しては悦に入り、凡そこのやうにしか生きる術がないといふ処にこそ、まことの刑罰があるのではないか。手のこんだ、又馬鹿らしい責苦だ。俺の心があればこれと彷徨ひ歩いた所以だ。これでは自然も愛想をつかさくことだらう。「倦怠を覚えるだらう。」俗物紳士ブリュドム君は基督と一緒に生れなすつた。

といつてゐる、この *divagations spirituelles* である。それは科学の宣言以来、キリスト教と人間とがやつてきたことに基く *supplice réel*, tort-

une subtile, naïve から出てきた divagations である。キリスト教と世俗としての人間の否定に出発したランボオの放浪であり、自己の世界を求めての否定行における放浪であった（したがって最後に詩筆を捨てて、完璧なる詩を行す底の放浪とは意味を異にする）。

今、この Plus de vagabonds と書いて、かかる vagabonds を必要としなすとしておぼすとは、この詩の “La race inférieure a tout couvert……” を言葉との関係に於いて考へられるべきことである。フランスの中にも、タリスマニズムの中にも自己の世界を見出すことのできない、全くの孤立した世界だといふことは、race inférieure がすべてをおぼした世界であることによるのだが、今、race inférieure がすべてをおぼしてしまふば、一切が否定しつくされてしまふば、上記の如き意味での vagabonds, divagations spirituelles を必要としなすわけである。

guerre と書いて、Guerre である。

Je songe à une Guerre, de droit ou de force, de logique bien impévue.

C'est aussi simple qu'une phrase musicale.

俺は、権利の、或は、力の、全く思ひもよらぬ理論の『戦』を夢みるのだ。

音楽の一楽節の様に埒もない。

と書いておぼす様に、また Adieu, p. 86 である。

Le combat spirituel est aussi brutal que la bataille d'hommes ;

精神の戦も人間の戦の様にむごたらしい。

地獄の一季節 註解

と書いておぼす様に、ランボオにとって、自己の世界を展開するまでの経路は、ことにその否定行は、一つの闘ひであったのである。今、race inférieure がすべてをおぼしてしまふば、もはやかかる否定行の闘ひを必要としなすのである。それが vagues であるのは、Guerre としておぼす様に「音楽の一楽節の様で simple」であることである。

La race inférieure a tout couvert—Le peuple, comme on dit, la raison ; la nation et la science : —

Le peuple は la nation に対応して、la raison は la science に対応する。peuple は世俗としての peuple であり、だから、comme on dit と書くわけであり、また言葉をかくして、しぎに nation と書くわけである。言葉をかくしてはより、よりはっきりと限定しておぼすのである。

raison, science との関係についても同様である。

race inférieure がこれの peuple, raison ; nation, science をちりちりおぼしたといふことは、これら世俗が、知性が否定せられたことをいふのである。世俗知性からの超越をいふのである。

Oh ! la science ! On a tout repris. Pour le corps et pour l'âme,—le viatique,—on a la médecine et la philosophie,—les remèdes de bonnes femmes et les chansons populaires arrangés. Et les divertissements des princes, et les jeux qu'ils interdisaient ! Géographie, cosmographie, mécanique, chimie !……

La science, la nouvelle noblesse ! Le progrès. Le monde

marche ! Pourquoi ne tournerait-il pas ?

そら、科学だ。人は全て飛び付いたのだ。肉体の為と魂の為に、——臨終の聖餐の秘蹟、——医学もあれば哲学もある、——万病に効く売薬とうまく並んだ流行歌だ。「お婆の万能薬か、うまく並んだ流行歌だ。」その上、王侯貴人の慰みや、またその禁制する遊樂だ。やれ地理学、やれ宇宙学、機械学、化学……
科学。新興の貴族。進歩だ。世界は進行する。何故逆戻りはいけないのだらうか。

Oh ! la science ! On a tout repris. Pour le corps et pour l'âme,
—Le viatique, — on a la médecine et la philosophie, — les remèdes de bonnes femmes et les chansons populaires arrangés : —

ところが、この俺をとりまく近代ヨーロッパ、フランスの世界は、科学の世界だ、すべてここから出発した世界だ。「科学の宣言」以来 *supplîce réel* をつけた世界であり、*torture subtile, naise* の世界である。しかも、*どういふいふ* 皆やうだ。On a tout repris.

その身と心とに対する *viatique* (救ひを与えるものとして比喩的に使つてある) としても、それは医学であり、哲学であるに過ぎない。これらが *viatique* となる様な近代ヨーロッパであり、フランスであるのだ。

Pour le corps et pour l'âme といふのは、ランボオの世界、真実なる神の世界は、単なる精神に対する世界ではなかった、身心をもつて行く世界であった、身は心であり、心は身であつたことよってかくいふのである。だから Adieu, p. 87 へ

et il me sera loisible de posséder la vérité dans une âme et

un corps.

そして、俺には、一つの魂の裡と肉体との裡に、真実を所有する事が許されるだらう。

といふのであり、また *Enfance, I へ*
Quel ennui, l'heure du (cher corps) et (cher coeur).

何といふ倦怠だらう、『親しい肉体』と『親しい心』の時刻。といふのである。尤も今、この場合では *corps* に対する *viatique* としつば *médecine*、*âme* に対する *viatique* としつば *philosophie* と分離して考へてみる。

この魂に對する *viatique* たる哲學としつば *L'Impossible*, p. 70 へ

Les philosophes : Le monde n'a pas d'âge. L'humanité se déplace, simplement. Vous êtes en Occident, mais libre d'habiter dans votre Orient, quelque ancien qu'il vous le faille, — et d'y habiter bien. Ne soyez pas un vaincu. Philosophes, vous êtes de votre Occident.

今度は哲学者だ。世界は若くも年寄りでもなく、年齢がないのだ。人類が単に場所を變へるだけだ。あなたは西洋にゐる、だが、あなたがあなたの東洋に住むのは御自由だ、——どんなに古代であらうと自由だし、——また手際よく住むことだつて御自由だ。負けてはいけない。哲学者共よ、君等は君等が西洋種だ。

といつてゐる。もちろん、真の *viatique* となるものでなく、依然として西洋種であり、その意味で科学と一類のものに過ぎない。

かくてランボオにとっては西洋を黙らせて il faudrait le faire faire 東洋の当初の永遠の眷知に帰らねばならなかったのである (L'Impossible)。

かくて医学も哲学も所詮は真の Viatique となるものではない、Les renèdes de bonnes femmes et les chansons populaires arrangés といふものだ。

bonne femme 女 simple et âgée 女 simple et âgée renèdes de bonnes femmes 女 simple et âgée renèdes populaires tel que ceux que connaissent les vieilles femmes 女 simple et âgée renèdes populaires tel que ceux que connaissent les vieilles femmes 女 simple et âgée renèdes populaires tel que ceux que connaissent les vieilles femmes。

Et les divertissements des princesses, et les jeux qu'ils interdisaient ! Géographie, cosmographie, mécanique, chimie!.....—

UO prince 王子 Conte 物語

Un Prince était vexé de ne s'être employé jamais qu'à la perfection des générosités vulgaires. Il prévoyait détonnantes révolutions de l'amour, et soupçonnait ses femmes de pouvoir mieux que cette complaisance agrémentée de ciel et de luxe. Il voulait voir la vérité, l'heure du désir et de la satisfaction essentiels.....

或る『王子』が、かへりみれば、ただ何の奇もない「世俗の」贅沢三昧に、日を暮して来た事を思つてむかむかした。彼は恋愛「愛」の驚くべき革命を予見してゐた、そして妻妾達には「女達には」お天気と装飾とに甘やかされた喜び以上のものは、一体が無理ではないのかと考へてゐた。彼は真実が見たかった、本質的な欲望

と満足との時が得たかった。.....

とある Prince、即ち愛の驚くべき変革を予見し、女達は世俗の埒を超え得ぬものであることを思ひ、真実を見ることを望み、本質的な欲望と満足との時を得ようと思ふに至るまでの Prince、したがって俗世の贅沢三昧に何の不満もいだかなかつた Prince である。

かかる Prince の慰みは世俗的な慰みに過ぎぬものである。

Les jeux qu'ils interdisaient 女 simple et âgée Les premières Communions 〇
Sous le Napoléon ou le Petit Tambour

Quelque enluminure où les Josephs et les Marthes

Tirent la langue avec un excessif amour

Et que joindront, au jour de science, deux cartes,

いづれ科学の御代になれば一つに結びつくだらうが、

別名「小さな太鼓」ことナポレオン三世の治世ゆゑ

シモンたちやマルトたちが別々に描かれて

恋じきの余り舌を出してゐる色刷りの二枚のカード、

とあるところを、思はせるものがある。その御法度とは恐らく道徳的意味での御法度であらう。例へば恋愛に関する御法度の如き。即ち社会の秩序を乱すものとして、実はそれだけに人の心を遊び戯れしめるものとしての御法度であらう。

かくて医学にしても、哲学にしても、科学といふものは、ランボオの立場からみれば、たかだか、Prince の慰み即ち世俗的な慰みか、それとも御法度になつた様な、例へば恋愛の様な人の心を単に遊び戯れしめる様なものに過ぎないとの意味であらう。Mauvais Sang, p. 23 下

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes n'étaient interdites
 だが、酒宴も女等との交友も、俺には禁じられてゐた。

とらつてゐる。

以下 Géographie, cosmographie, mécanique, chimie……等々科学の諸
 分野を列挙して、いづれも同じだとの意である。

La science, la nouvelle noblesse ! Le progrès. Le monde marche !

Pourquoi ne tournerait-il pas ? —

科学への進展、歴史の変転をなす。La nouvelle noblesse は当時のフランスが革命動乱の時代であつたことに基く新しい貴族をいふ。かく科学は進み Le progrès 世の中は歩み変転して行く。しかしそれは科学の方向へであり、二元対立の相対的世界の境を超えないものである。いはば「西洋」の方向への歩みにすぎない。だからランボオとしては、
 Pourquoi ne tournerait-il pas ? といふわけである。tourner する方向は科学や西洋の方向ならぬ、nature の方向へ、Orient の方向へ、ランボオ的世界の方向へである。科学、西洋の否定の方向へである。

Cf. Démocratie.

Au revoir ici, n'importe où. Conscriés du bon vouloir, nous
 aurons la philosophie féroce ; ignorants pour la science, roués pour
 le confort ; la crevaision pour le monde qui va. C'est la vraie
 marche. En avant, route !

この土地はおさらばだ、何処へとも構はぬ。善良な意欲をもち
 丁である俺達は、猛悪な哲学を持たう。学問には文旨に「科学の代り
 に文旨を」、歡樂は身を裂いても求めよう「慰安の代りに放蕩を」。歩み

行くこの世とは決裂だ。これこそ真の發展だ。前進せよ、出發だ。

C'est la vision des nombres. Nous allons à l'Esprit. C'est
 très certain, c'est oracle, ce que je dis. Je comprends, et
 ne sachant m'expliquer sans paroles païennes, je voudrais
 me taire.

これが多数の幻想である。俺達は『聖靈』に行きつくのだ。俺の言葉は神託だ、それは極めて確實だ。俺には解つてゐる、ただ、解らせようにも異教徒の言葉しか知らないのだから、俺は黙つてゐた
 いのだ。

C'est la vision des nombres. Nous allons à l'Esprit: —

科学の方向へ、近代文化の世界西洋の方向への歩み、それが多くの人の
 達のいたつてゐる vision なのだ、われわれの行手は Esprit である。
 この Esprit はランボオの世界を指すものと思はれる。ランボオは自己
 の世界を聖なる世界、神の世界と考へてゐるから、Dieu と同義のもの
 と考へてゐるであらう。だからつぎたいふ様に自己の言葉を oracle と
 するのである。

Cf. Enfance, IV.

Je suis le saint, en prière sur la terrasse,……

Je suis le savant au fauteuil sombre,……

Je suis le piéton de la grand-route par les bois nains ;……

Je serais bien l'enfant abandonné sur la jetée partie à la haute
 mer,……

俺は、岡の上に、祈りをあげる聖者、……
俺は陰鬱な肘掛椅子に靠れた学究、……

俺は、矮小な森を貫く街道の歩行者。……

本当に、俺は、沖合に遙かに延びた突堤の上に棄てられた少年か
も知れぬ。……

といつてゐる様に、ランボオは自己を聖者として、学究として、歩行者
(修行者)として、そして子供として考へてゐるのである。即ちランボ
オの世界は神の世界であり、真理の世界であり、自己はかかる世界を行
ずる行者であり、その行為はまた子供の行為、即ち嬰孩行であつたので
ある。

なほじぎの節 p. 18 におつても

L'Esprit est proche: pourquoi Christ ne m'aide-t-il pas, en
domant à mon âme noblesse et liberté. Hélas! l'Evangile a
passé! l'Evangile! l'Evangile.

J'attends Dieu avec gourmandise.

『聖霊』は真近にある、何故基督は、俺の魂に高貴と自由とを与
へて、俺を助けては呉れないのか。ああ福音は去ってしまった。

『福音』よ。『福音』。

俺は貧欲にがつがつして『神』を待つてゐる。

といつてゐる。

C'est très certain, c'est oracle, ce que je dis. Je comprends, et
ne sachant m'expliquer sans paroles païennes, je voudrais me
taire:—

ランボオが自己の世界を聖なる神の世界として把へてゐるとすれば、
自己の言葉は oracle であるわけである。しかし現に自己が語る言葉は
日常のフランス語であり、いはば異教徒の言葉に外ならぬ。しかもこの
言葉をもつて語るより外にすべがない。ところが神の世界は思慮分別を
超えた、したがって、言語を超えた世界であり、所詮はこの異教徒の言
葉をもつてしては語り得ぬ世界である。体認はしてゐても言葉をもつて
しては至り得ぬ世界である。かくて je voudrais me taire といふわけ
である。

なほまた言葉をもつて語ることを、本来無用とする世界でもあるの
で、ランボオは言語に対しては絶望的であり、否定的であつた。にもか
かはらず、今はかく語つてゐるのである。Délires II, p. 52 におつても

J'écrivais des silences, des nuits, je notais l'inexprimable. Je
faisais des vertiges.

俺は沈黙を書き、夜を書き、描き出す術もないものを書きとめ
た。俺は様々な眩暈を定著した。

といつてゐる。ここに狭義の詩人としてのランボオが存在するのである
が、後遂に語ることをやめて、放浪に詩を行ずるに至る。そこに広義の
詩人(あるいは完璧なる詩人)としてのランボオが存在するのである。

(未完)